

氏名	かな みつ けい こ 金 光 桂 子
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 185 号
学位授与の日付	平 成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学位論文題目	『我身にたどる姫君』の研究

論文調査委員 (主査) 助教授 大谷雅夫 教授 日野龍夫 教授 木田章義

論 文 内 容 の 要 旨

第一章 女帝の人物造型をめぐる

『我身にたどる姫君』の「女帝」という人物は、かぐや姫の系譜を継ぐ天女であるとともに、死後兜率内院に往生したという設定に特徴がある。それは別伝的な巻六で明らかになることだが、崩御の場面でも『法華経』の経文が女帝の兜率往生を暗示していた。極楽や他の諸天と比較して、天と浄土の二面性を有する兜率内院は、天女かつ往生者という女帝の人物像を表すに最適の地であったと思われる。

先行物語の中で兜率往生を願った人物として、『狭衣物語』の主人公狭衣が挙げられる。不慮の登極をはじめとして、女帝と狭衣の履歴には共通点が多いが、両者の決定的な差異が兜率往生の可否であった。狭衣が唱えたのと同じ『法華経』の経文を仄めかすことによって、女帝の悟りは狭衣の迷妄と対照されている。また、天女の登場する先行物語には『松浦宮物語』『有明の別』がある。女帝主催の法華八講に天衆が現れた場面と『有明の別』の天女降臨場面とを比較すると、現世に留まり続ける『有明の別』の女院に対し、決然と往生を遂げる女帝の姿が際立つ。

物語史の流れからいえば、この世の濁りに穢れず天へ帰還した天女という点で、女帝はかぐや姫に近付くのだが、単なるかぐや姫の再現ではない。現世における最高の身分、往生譚の要素、『源氏物語』の紫上の臨終場面を模した情趣など、物語史の流れを受けて、さらなる理想化が施されていた。女帝の人物造型には先行物語の主人公たちの粹が集められており、その結果、現世・天界・仏教といったあらゆる点から見て完全無欠の存在となったのである。このように力を注いで造型された女帝は、物語における存在感も大きく、物語が大団円の結末に到達するまで、死後も冥界から影響を及ぼし続けているようである。

第二章 虚構の歴史物語

中世の物語の傾向として、一貫した主人公を持たない歴史物語的作風ということが指摘され、『我身にたどる姫君』もその一例に挙げられている。しかし『我身』は、他の作品以上に「歴史物語的」という印象を与える物語である。その理由は、物語の特に後半部が、代々の帝を機軸に展開すること、しかも帝周辺の人物が、史上実在の人物を材として造型されていることであろう。たとえば、「三人の後」が問題となる三条院後宮の構成は、後冷泉・後朱雀両天皇の後宮を組み合わせた形になっている。また、物語最初の帝、水尾院の後宮と皇子女たちは、史上的一条天皇に倣っているらしい。その間の天皇たちについても対応関係を考察すると、結局『我身』の水尾院から三条院に至る代々の帝は、史上的一条天皇から後冷泉に至る歴代を、順序もそのままに覆うことになる。

このように物語世界が史実と対応し、しかもその対応が皇統譜を中心としている点に、とりわけ歴史物語への志向が感じられる。さらに、後宮への着眼が顕著であり、外戚藤原氏の後宮政策を支持する言辞も少なくないことから、その虚構の歴史物語は、撰関全盛期を舞台に選んだことと符合して、すぐれて撰関政治の論理に基づくものだったといえよう。その『我身』が主に用いた資料は、やはり後宮を軸に撰関政治の発展を描いた『栄花物語』であったと思われる。また、准拠を有効

に用いた『源氏物語』の影響もあろう。

ただし、最も顕著な形で史実との対応が見られた「三人の後」に関する記事が、『栄花』には存在しない。後冷泉天皇から後三条天皇への代替わり前後、親政を志す新帝と関白頼通の対立を、「書きにくうわづらはし」という理由で省筆しているのである。『我身』がちょうどその時点で、女帝の即位という歴史離れを起こすことは、偶然の一致ではないように思われる。もっとも、ここで完全に史実から離れてしまうわけではなく、物語最後の今上帝は、養母女帝を通じて嵯峨院の流れを引き、二つの皇統を統合したという点で、母方から三条天皇の血を引いた後三条天皇と同様の立場にある。しかし両者の大きな相違は、後三条が摂関家と不和であったのに対し、今上帝は摂関家と協調的な外戚関係を保ち、摂関政治体制を前提とする理想的な聖代を築いたことである。

こうした大団円の結末に至るにあたって、大きな意味を持っていたのが、嵯峨院の娘女帝の即位であった。女帝への譲位の理由は、皇子のない嵯峨院への配慮だった。それによって、同じく断絶する運命の皇統でありながら、史上の三条天皇のような悲劇性が、嵯峨院からは払拭されている。皇女の即位によって断絶皇統の無念を慰撫するという着想は、史上の後一条天皇の皇女章子内親王に発したようである。また、三条の皇女禎子内親王が経験した不遇も、それに対応する『我身』の女帝においては、やはり章子の性格を加味することによって解消されていた。その他にも、史実に倣う形で皇位継承や立后をめぐる対立的状況はいくつか設定されているが、いずれも深刻な政治的抗争に発展することは避けられ、決定的な敗者や矛盾を生じることはない。だからこそ、二つの皇統・摂関家を含めて万事調和した理想的な聖代が、円滑に導き出されたのであろう。

摂関全盛期には、栄華の陰で不遇をかこっていた人々も多く存在したが、『我身』はそうした汚点を取り除くべく、依拠した史実に改変を加えていた。その意味で、はじめから安易に予定調和の方向を目指していたともいえるが、摂関全盛期の矛盾を見抜いた上で、それを解消する手段を講じた歴史認識と創作手腕は、相応に評価されるべきであろう。

第三章 聖代描写の源泉

『我身にたどる姫君』の女帝について、『今とりかへばや』のような「女の物語」の系譜を継ぎ、女性たちの潜在願望が託された人物と捉える見方がある。しかし、女姿のままで君臨し聖代を築いたという点で最も近い先蹤は、『松浦宮物語』の鄧皇后であろう。女帝の崩御前後の場面には、『松浦宮』の華陽公主の影響もあるが、『松浦宮』の幼帝を英邁な母鄧皇后が補佐教導するという構図は、『我身』の今上帝と養母女帝及び実母藤壺の関係に相似しており、女帝の帝王像が鄧皇后に由来していることが確認できる。

『松浦宮』の作者が藤原定家という男性貴族だったとすれば、その男性作者が造型した鄧皇后を先蹤に持つ女帝の理想的帝王像を、「女の物語」の展開上に位置付けてよいであろうか。漢籍に親しみ実際の政治の場に関わっていた男性作者である以上、女性読者の歎心を買うという意図もあったかもしれないが、儒学的政治理念を体現するような鄧皇后の帝王像には、第一に政治的理想を託していたと見るべきであろう。『我身』の場合、女帝の帝王像がその鄧皇后に原拠を持つばかりでなく、最後に聖代を完成するのは男性の今上帝であることからしても、「女の物語」という捉え方では不十分で、むしろ、物語において聖代が詳しく記されること自体に注目すべきなのではなかろうか。

『源氏物語』以来、物語は政治向きの話題に深入りしないのが原則であった。鎌倉前中期成立の物語には、帝徳や聖代への賛辞を備えるものも少なくないが、いずれも物語の背景の域を出ない。しかし『我身』の女帝や今上帝の御代には、聖代描写自体を目的としていたように思われる記事があり、それに匹敵するものを有する先行物語は、やはり『松浦宮』ぐらいである。『松浦宮』の作者が、古代の中国を舞台とする空想的な物語の中で、儒教的政治理想を実現させた聖代、それを日本の王朝時代に移してきたのが『我身』だったといえよう。

第四章 聖代描写の意義

前章で触れたように、『我身にたどる姫君』は女帝・今上帝の御代を聖代として称賛するが、特に今上帝の治世には、かなり具体的な政策にまで言及している。その内容を細かく見ると、いずれも実際に政治の場で善政の典型として取り上げられやすいもの、しかし同時に、物語成立当時の現状からすれば到底実行できそうにない、おそらく延喜聖代あたりを意識した理想論でもあった。男性作者によるきわめて空想的な物語『松浦宮物語』と異なり、身近な宮廷社会における伝統的な恋愛物語の中に、こうした政治向きの話題を取り込んだ『我身』には、政治理想の自由な開陳にとどまらぬ思惑があったこと

が予想される。

今上帝にはもう一つ、男女関係において身を慎んだという美点があり、それを象徴するのが、『白氏文集』の「李夫人」に典拠を持つ自誠の言であった。『松浦宮』の偽跋も同じ詩句を教訓的に引用していたが、なお物語本体では恋に迷う男女を描いていたのに対し、『我身』はその教訓を忠実に守る人物を造型した。そこには、『白氏文集』の諷諭詩を教訓目的で用いることの増える時代趨勢とも照応して、読者に対する訓誡の意図が込められているのではなかろうか。こうした対読者意識の背景には、狂言綺語観による物語批判を克服するため、物語に教誡の効用を求める風潮があったことを考えておかなばなるまい。

物語に期待された教誡性は政治的な方面に及ぶこともあり、宮廷周辺では特にその傾向が強かったであろう。そうした享受のあり方は、勅撰集に準ずる物語歌撰集『風葉和歌集』として結晶する。『我身』は『風葉集』編纂とほぼ並行する時期に書き進められていたと推測されるので、宮廷に近い場所の人物と思しい作者が、その撰集作業から何らかの刺激を受けた可能性もあろう。当時の宮廷周辺に顕著だった政教的物語観に反応して、自らの物語の地位を高めるべく天皇への教誡の意を託したものが、『我身』の長大かつ具体的な聖代描写だったのではなかろうか。

第五章 卷六の位置付けについて

『我身にたどる姫君』全八巻の内、別伝的性格を持つ巻六には、成立に関する論議がある。他巻と共通する要素も多いため、別作者説には従えないが、現行巻序通りの執筆か後から追補されたものかは、決定的な外証がなく定めがたい。巻六は時間的に並行する巻五ばかりでなく、最終の巻八とも複雑な関連がある。巻八末尾の後日談で初めて述べられる事柄が、巻六末尾の後日談の部分で、いかにも既知の事柄のように語られているのである。この不自然さは、巻序執筆説でも巻六後補説でも説明しがたく、成立過程論に帰せられない問題となってくる。巻六末は巻八末を前提として読むよう求められているという事実を認め、物語の構造の面から再検討する必要があるだろう。

一般的に物語の大尾には、祝言性・宗教性の強い内容や伝聞形式といった典型があり、同時代の物語のほとんどはその伝統に則っている。それらに比して、本物語の巻八末尾は、物語全篇の大尾としては甚だ物足りないという不審がある。ただし、巻八最末部の後日談の直前に位置する場面は、物語冒頭部分との照応が図られており、その意味では終結部として相応しい。しかしやはり大尾らしい形は取らず、蛇足のような後日談が続くのである。

巻八以外の巻々にはそれぞれ巻末意識が見られる中で、特に顕著なのが巻六の巻末であり、一篇の物語の大尾としても申し分ない形といえよう。巻六末の後日談と巻八末の後日談との前後関係を勘案すれば、巻六末こそまさに全篇の大尾のように見えてくる。つまり巻八末の後日談は、巻六末という大尾への誘導の役割を果たしているのである。このように複雑な技巧を凝らしたところに、物語の伝統・典型への拘りを読み取ることができるし、また、物語の大尾に位置付けられる巻六の意義を再評価する必要も生じてくるだろう。

第六章 巻六における仏教的教誡

前章を受けて、巻六巻末部の後日談について再考する。まず後日談の範囲を明確にしておくとして、伝本の一つの金子本には、巻六の文章の途中で改行を施している箇所があり、ちょうどその時点で、前齋宮をめぐる物語が決着を見ることから、そこに区切りを置いてよいであろう。そしてその後日談は、女帝と近習女房たちの往生に関する話題で首尾を整えているなど、仏教色が際立って濃厚である。ただし巻六の本体部分と別個に成立したものでないことは、前齋宮物語の中に後日談への伏線と思しき記述があることから確認される。

巻六の後日談は、その濃厚な宗教性にも関わらず、諧謔性もまた顕著である。そこで『我身』の他の巻々に目を転ずると、悲恋遁世譚の流行する時代思潮の中であって、仏教関係の記事が乏しいことに気付く。関心が低いばかりでなく、往生のように最も理想的であるべき事柄に対して、皮肉まじりの冷やかな態度を見せることもあった。そうした態度は巻六後日談にも通じるものであるが、ではなぜもともと宗教的なものへの志向に欠けるこの物語が、巻六後日談のみ仏教色を強めるのだろうか。

その背景として、狂言綺語観による非難を克服するため、『源氏物語』に仏教的教誡の意義を見出すという物語享受のあり方を考えておきたい。『我身』も当時優勢だったそのような物語観に則り、本系の巻々では稀薄だった仏教的な教訓を、好色の誡めとともに、巻六後日談に盛り込んだものと思われる。しかしこの作者の性向からして、仏教色が強まればますます

す諧謔性も助長され、後日談に、ひいては巻六全体に特異な性格を与えることになったのではなからうか。

論文審査の結果の要旨

『我身にたどる姫君』をはじめとする中世の王朝物語については、『源氏物語』を模倣する一方で猟奇的な趣向をほしのままにするものとして否定するか、あるいは、その猥雑・頹廢をこそ斬新さとして見て肯定するか、評価は両極端に分かれがちであった。本論文は、その『我身にたどる姫君』に正面から取り組み、本作品が従来の物語の伝統をいかに承け、いかにそれと異なるかを明らかにしようとする試みである。論者は、文章・内容ともに複雑なこの物語を丹念に読み解き、史実や先行作品の撰取のありさまを詳細に指摘し、それらの原拠と比較対照することによって、女帝・同性愛といった新奇な趣向それ自体を物語の伝統の中で捉え直し、それを文学史的に位置づけるべく考察した。

例えば、第一章は、この物語の重要な登場人物「女帝」の人物造形を考証する。「法花経」の「八のまき」を手にして崩御したという暗示的な片言に着目した論者は、その「八のまき」が、法華経読誦の功によって兜率天に往生できることを説く法華経巻八「普賢菩薩勸発品」を指すことを周到に考証し、さらに、女人不在の極楽や、天女も五衰を免れないという切切利天ではなく、極楽に匹敵する浄土でありながら人間界への通路をも失わない兜率天こそ、完全無欠の人柄に描かれ、死後も物語世界に姿を現して大きな影響を及ぼし続ける女帝に相応しい往生の場所であることを明らかにした。また、天に帰還した天女の物語という点で『竹取物語』以下の流れを承けてさらにそれを徹底して理想化すること、同じく兜率往生を願いながら迷妄の中に終わった『狭衣物語』の主人公に類似してそれとも異なることなど、『我身にたどる姫君』が先行する物語の流れを承ける一方で新たな独自の世界を創り出したことが、それらの考証によって明確にされた。

第二章では、『我身にたどる姫君』の描く水尾院から三条院にいたる皇統が史上的一条天皇から後冷泉天皇に至る歴代に基づくことが、『栄花物語』などとの詳細な比較対照によって考証された。その結果、平安時代には実在しなかった「女帝」の虚構が、親政を目指して関白藤原頼通と鋭く対立した後三条天皇に相当する立場に、撰関家とも協調的な今上帝の置かれる「歴史離れ」を生ぜしめていることが明らかになった。撰関家を賛美することを基調とする『栄花物語』が「書きにくうわづらはし」と敢えて言及しなかったその時代を、天皇家・撰関家の融和する理想的な御世とし、史実の撰関家の栄華の陰にあった政治的抗争・不遇を完全に隠し、解消してみせることが、『我身にたどる姫君』の虚構の歴史物語の方法であったことが明確にされたのである。実際の歴史と、物語の描く歴史との詳細な比較によって、『我身にたどる姫君』の作者が撰関政治の実態をどのように見て、それをどのように理想化し、物語化しようとしたか。緻密な考証の末に、作者の創作意識にまで踏み込む分析が果たされた。微視・巨視かねそなえる好論である。

また、第三・第四章は、本作品に帝王への教誡の意図が託されていることを『松浦宮物語』の撰取の跡などにより推測し、第五・第六章では、成立事情に種々の論議があり、また滑稽・猥褻な表現の目立つ特異な性格によって知られる巻六について、まず物語の構造上の位置を見定めた上で、そこに実は仏教的教誡が示されているという意外な意味を読み取って、その再評価を試みるものである。

六つの章を通じて、本論文は、豊富な知識と周到な調査と、多面にわたる緻密な考察とにより、説得的な結論を導き出すのに成功している。『我身にたどる姫君』研究史の一面期をなす論考として高く評価できるであろう。また、『我身にたどる姫君』が『有明の別』『松浦宮物語』などの趣向・表現を撰取した跡を検証することによって、これらの物語の間のつながりを見出し、いまだ体系化されるに至らない中世の物語史の整理に寄与したことも、副次的とはいえ、大きな成果であった。

ただし、本論文にも疑問、あるいは不十分な点がないわけではない。例えば、本作品を通じて顕著な仏教への揶揄の姿勢と、第一章で明らかにされた兜率往生の重視とは矛盾しないか。帝王への教戒や仏教的教戒と、この物語の最大の特徴である滑稽・卑猥とは、一作品の中で矛盾なく共存し得るのか。それらの疑問に対する答えは、本論文には必ずしも十分には用意されていない。また、その滑稽・卑猥な面についての考察が本論文では手薄である上に、論述の対象が物語の後半部に集中して前半部への言及が少ないため、作品の全体像が十分には浮かび上がってこないという憾みもある。それらを今後の課題として、この研究がさらに継続、発展させられることを期待する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成13年2月21日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。